

日本古代地域史研究の新視点

—空間分析と生態学的アプローチ—

今津勝紀

はじめに

地域史研究にどのような意味があるのだろうか。そこに可能性があるとしたらどのようなものであるか。もとより日本史、日本古代史研究全体を見渡すような議論ができるわけではない。あくまでも、徒然思うところにはすぎないのだが、駄文を連ねることにはしたくない。

地域を問うといった場合、すぐに思い浮かぶのが、地域的な個性や多様性を明らかにすることを立脚点として、全体を見直すなどの固有の意味だろう。こうした視点はすでに広く共有されており、これまでも日本古代史研究で

は多くの地域史研究が重ねられ、貴重な成果が蓄積されてきた。この点はこれからも変わることはないだろうが、近頃は地域そのものを問うことに、より積極的な意味があるのではないかと考えはじめている。

これまでの地域の議論の仕方は、日本史という全体を前提としたものであったが、そもそも日本史という個別史は、どのような普遍性を有しているのだろうか。この点が心許ないのである。世界はグローバル化の嵐に翻弄されており、そうした事態に対抗もしくは対応して地域への眼差しがあることは間違いないのだが、人間の生活の場としての地域を問うことを通じて、人類史を見据えるにはどうすればいいのだろうか。

今、ここに答えがあるわけではないが、以下、そうした

地域をめぐる論点を振り返るとともに、新しい地域をめぐる問題群、及びそれに近づくための新たな研究方法を紹介し、地域史研究の可能性を考えてみたい。

一 地域間関係と地域社会

まず、地域をどのようなものとして捉えるかによって問題の射程が変わるのは当然だが、ここで想定しているのは、人間が生活する上で意味をもつ空間的広がりについてである。もとより意味を持つというのは、時に認識の範囲であったり、具体的に作用・機能する空間であったりするので可变的なのだが、厳密にその範囲を措定することができない性格のものである以上、曖昧さを保持したまま扱わざるを得ない。このような曖昧な範疇を措定することへの批判もありえようが、おおくりに問題を捉えることも時に有効ではないだろうか。ここでは、その程度のものとして地域を考える。

歴史学は過去という時間に関する学問なのだが、歴史の展開する「場」は空間として存在した。歴史学はそうした時空間を把握し、理解する学問なのであり、空間的に事物を把握することも歴史学にとって重要な意味をもつのだが、この点は考古学も同様である。考古学では遺物・遺構

の編年を基礎として、考古資料の操作により対象を理解するのだが、例えば古墳時代の場合、単体の古墳がものを言うわけではなく、類例と対比させる操作が必須であり、その作業を通じてそれぞれの意味を見いだすこととなる。必然的に考古学的分析の基礎には、対象の相互関係の理解が横たわるのだが、これは具体的には地域間関係などとして表現されることになる。考古学が空間を得意とするのは、その存立に由来する。

これまでの歴史学は時間軸を中心に議論をすすめ、考古学と歴史学との方法的差異が強調されてきたりもしたが、過去を対象とする歴史学にとって、文字資料のみがその研究対象となるわけではない。なによりも、過去を明らかにすることが目的である以上、過去に関するさまざまな資料が駆使されるのは当然である。過去をより実態的にあきらかにするためには、時空間の復原という視点が必要である。今から十年以上前に、『史学雑誌』の「回顧と展望」に「五世紀の王権を構成するのが首長間の連合体である以上、王権形成史は地域間の首長の交流として論じることが可能であろう。王権形成史は、地域に即して具体的に論じられる段階にあるのではないか。地域間交流の具体化が課題である」と述べたことがあるが、この考えは今も変わらない。地域間関係史として王権形成過程を明らかにする

ことが求められているのだが、考古学と応答しつつ、地域に即して明らかにすることが必要である。

また地域そのものについてだが、これまでにも日本古代史研究では地域社会を問うことは行われてきた。古くは、石母田正の在地首長制論が大きな影響を与えたが、いろいろな機会に述べてきたように、この議論は具体的な地域分析から導かれたものではなく、あくまでも作業仮説である。これは当時の社会構成体をめぐる論争を背景に生まれた学説であり、理念的に措定されたものであった。石母田以降、日本の古代社会において在地首長、首長なるものの姿を検証しようと試みるのだが、首長制原理が存在し、それが機能していたことを実証しえた研究は存在しない。

ある意味、首長の姿を実証し得ないことは当然のことなのだが、現在に至るも在地首長制論を継承する原生的共同体論に依拠する研究は根強く支持されている。原生的共同体論は、女性史研究と軌を一にするもので、家長制的世帯共同体として把握されてきた個別経営の存在を否定し、非自立的で流動的な小家族が、首長により人格的に体现される共同体を漂うという未開な古代社会像を描く。古代国家の支配の基礎にこうした共同体を措定することは、石母田からさらに遡ってマルクスのアジア的共同体論に帰着するのだが、この場合、地域社会がそのまま共同体とみなさ

れるように、地域社会内の諸現象は、措定された首長制支配の名のもとに、無批判に回収されることになりがちである。在地首長制論を前提に、古代の地域社会の実態を考えることは困難である。

そうした理論的困難とは別に、古代地域史研究の条件は変化しつつある。例えば、都城以外の諸地域で出土する木簡や墨書土器などの新史料はいずれも地域社会の実態を考える上で有効である。個々の研究事例をあげることは紙幅の都合で控えるが、地域社会の実態をめぐる実証的成果は確実に蓄積されている。しかし、これを統合的に理解することができていないのが現状ではなからうか。これまでの理論的枠組みが桎梏である。

歴史学は事実を明らかにする学問であるため、古代社会の実態が当然問われるわけだが、古代の社会組織の認識をめぐる議論の中から、より実態に近いものとして村落首長一個別経営論が提起され、村落を含む地域社会の構造の具体的な検討が重ねられてきた。古代の人々の生活は、家族的小集団の基礎的な結合と村落組織を基盤として成立するのだが、その内容を明らかにすることが課題である。村を単位に生活する人々の日常に密着した形で水田や山野河海の実態など、まだ判らないことが多いし、村落を構成する家族的小集団が、土地を利益・占有するにし

でも、起耕・播種・収穫までを自らの計算で実施しえたかどうか、村落的規制の評価はこれまでの論争の焦点でもある。

村落での生活に即しても明らかにすべき課題は多くあるが、人々の取り結ぶ諸関係はこの範囲で完結するわけではなかった。人々が村落を越えたどのような空間的広がりにおいて、如何なる関係をもとに結びついていたのか、物資の流通や通婚の実態なども課題である。そして、こうした生活のあり方が公的秩序とどのように関連し、国家による支配がどのように実現していたのか、日本古代の地域社会を全体構造の中に位置づける必要があるだろう。地域社会は、さまざまな要素により構造化されており、村々はそれを取り巻く政治的・経済的・社会的・自然的諸関係の中に存在したのだが、そうしたものを捉えうる村落史を超えた視点が求められている。

もとより、ここには多様な問題があるのであり、さまざまな切り口がありえるのだが、さしあたり、自らの関心にしたがって言うならば、これまであまり顧みられることのない自然条件はやはり無視しえないように思う。水田や山野河海の利用にかかわる生産過程などは直接影響を被るが、それだけに止まらず当時の人々の身体、生存にも大きな影響を及ぼしたと考えられる。こうした古代の人々

の生活、生存の具体的なあり方は、人間の文化的・自然的条件に規定された、その時々⁵の適応を反映したものにほかならないのだが、その適応を統合的に理解することが地域生活史では求められることになる。なかなか困難なことだが、この点で示唆を与えるのが生態学である。

狭義の生態学とは、生物の進化を扱うようなものなのかもしれないが、ヒトの環境への適応を研究するのが人類生態学であり、医学・生物学・気候学などの自然系の諸分野と、人類学・社会学・地理学などの人文系の諸分野の協力が不可欠な新たな学問である⁶。人間は社会を構成し文化・文明を有する点で、動植物の生態を問うのとは異なる。そのため、人間にまつわるあらゆる分野の学問が関わって、人間の生存と適応を考えることになるのだが、一九世紀の古典理論で措定された人と自然をめぐる哲学的関係を前提とするのではなく、現代科学の普遍的な文脈を基礎に、それは組み立てられる必要があるだろう。

ちなみに、こうした環境と生態に関する関心は、すでに考古学や日本中世史研究でも一般的である⁶。それに比して、日本古代史の分野では、史料制約もあってのことだが、研究が著しく立ち遅れている⁷。人々の生活と生存の場としての地域社会を生態学的に捉え直すことは意味あることと考える。

二 地域社会の生態学的アプローチ — 飢饉と疫病 —

古代の地域社会に対する生態学的アプローチについて、いくつかの論点を示しておこう。

まず、日本の古代社会は流動性の高い不安定な社会であった。多産多死型の社会であり、多くの命が生まれるとともに、亡くなるという、いわば新陳代謝の激しい社会であった^⑧。家族的結合も不安定であり世帯も流動的である。再婚による世帯の再構成が頻発するのだが、こうした流動性は男女関係が双系制に適合した対偶婚に規定されていただけではなく、当時の人々の自然条件への適応状況を反映したものであったと考えられる^⑩。その自然的条件を客観的に示すことが課題なのだが、古代において、人々の生活に直接的に影響を与えた最大の脅威は、飢饉と疫病であった。もちろん地震や風水害、火山噴火などの自然災害も発生するが、飢饉と疫病の発生頻度と被害の空間的広がりには及ばない。

日本中世史研究によると、平安時代後期の温暖化以降、炎暑・旱魃・飢饉・疫病が引き起こされ慢性的な農業危機の時代を迎えること^①、さらに中世後期に慢性的な飢饉に見

舞われることが明らかにされている^⑫。そうした飢饉時には、旧暦の季節で言えば春から初夏に死亡が集中するのだが、実はこうした死亡の季節性は古代でも同じであった。

『続日本紀』の飢饉の記事百四十一件を拾い出してみると、その記事がかけられている月は、旧暦の春三月から夏四月にかけてが最も多く、この時期に飢饉の記事が集中する^⑬。天平十一年（七三九）の備中国大税負死亡人帳は大税出挙を受け死亡した者の負税を免除するための帳簿で、死亡人の歴名と免税額・死亡月日が記載されているが、その死亡月日を集計してみると、突出して多いのが夏五月であった。天平十年から十一年にかけては、その前後に比してまれにみる安定した年であり、備中国は飢饉に見舞われていない。これが平年の状況なのであろう^⑭。

新村拓は、平安末にいたる上中級官人の死亡月や疫病発生の記録を精査して、疫病が春三月から夏五月に多く発生し、夏五月から初秋の七月に死亡する例の多いことを指摘しているが、このように死亡が集中することの背景には、「夏時に至りて、必ず飢饉あり」と表現される状況が存在した^⑰。史料上「飢疫」と表現されるように、飢饉が発生すると必然的に疫病が蔓延する。当然のことながら、飢饉の状態では栄養状態が悪化し抵抗力も弱まり、悪食も行われたであろう事は想像に難くない。春から夏にかけて、慢性

的な飢饉状態にあるわけで、それにともない疫病に見舞われるのである。これが古代社会の基礎的条件であった。

古代の疫病については、天平九年（七三七）の天然痘の大流行はよく知られるが、それ以外は具体的にはよくわからない。ただし、当時、中央政府の医療行政を担っていた典藥寮と全国の国衙では常に準備すべき薬として、傷寒・時氣・瘧・利・傷中・金創の諸薬が規定されていた¹⁸。このうち、傷寒は寒気による熱の病、時氣も四季の気候変化に反して起こる時々々の病であるが、瘧はハマダラカが媒介するマラリア原虫による感染症であり、利は赤痢菌感染による下痢や発熱などの症状、傷中は内臓の疾患とされており、これらが普遍的な疾病であった。人類が畜群を管理するようになって以来、犬・牛などに由来する結核や麻疹などの感染症が人間の世界に入り込んでくるのだが、こうした病原体は日本の古代にも存在した¹⁹。それらの病原体が存在するためには、宿主との接触が不可欠であり、一定程度の人口の集中が必要なのだが、古代においてもつとも人口密度が高かったのは都城であつたろう。

都城と地方の地域社会を結ぶ最大の往来は、毎年二月・四月・六月・八月の春米輸納、冬十月からの調庸輸納であり、それぞれ数千人規模の脚夫と駄馬・牽夫が上京した²⁰。都城を造営していた時期にはこの上に役夫も徴発されたが、

彼らは「諸国役夫及運脚者。還郷之日。糧食乏少。無由得達」という状況であつた²¹。天平宝字二年（七五八）の冬には平城京の市辺に餓人が多くあつたとされるが、それは諸国の「調脚」の帰郷困難者であり、「或因病憂苦。或无糧飢寒」という有り様だつた²²。大同三年（八〇八）二月四日には、「往還百姓、在路病患、或因飢渴、即致死亡」²³ののだが、死骸が路傍に放置されたままであるため、その埋葬が命じられる。ここにみえる往還の百姓で路に在りて病を患うものとは、京中で流行していた疫病に罹患したものであつた。大同二年の末より京では疫病が流行しており、大同三年に至つて全国へと拡大し、五月には飢疫を言上する諸国の調が免除されるにいたる。このように、京下で疫病にさらされる脚夫は多くあつたと考えられ、彼らが帰国することで、諸国が飢疫を言上する事態に至るのである。もとより列島外からもたらされる疫病もあるが、古代最大の人口集中地である都城へと上京した脚夫たちは、そこでさまざまな病原体と接触した。都城へと中央化される人と物のシステムを介して、列島各地に疫病は拡散したのである²³。

こうした疫病が地域社会に及ぼした影響だが、時に壊滅的打撃を与えることとなる。例えば、貞観年間には全国で疫病が大流行するが、まず貞観五年（八六三）正月廿七日に、御在所及び建礼門・朱雀門で災疫を攘くため大祓が行われ、

飢病尤も甚だしとして京中で賑給が行われる。この時は「自
去年冬末、至于是月、京城及畿内畿外、多患咳逆、
死者甚衆矣」という有様だった。²⁶この場合、咳逆（しわぶ
きやみ）とされる呼吸器系の疾患が流行するのだが、咳逆
はその後も収まることなく、この疫病をもたらしたのは怨
霊の仕業として、ついには平安京の神泉苑で怨霊を鎮める
ための御霊会が執り行われるに至る。貞観六年に入っても、
疫病は拡散し、「今疫死百姓、無国不^レ申」という状況
になるが、なかでも山陽・南海の被害が深刻だったようで、
十一月には五畿内と山陽・南海道で般若大乘を転読させて
いる。²⁸そして、貞観七年・八年にかけて伊勢・志摩・因幡・
隠岐・出雲・隠岐・美作・備前・備中といった国々で疫病
の被害が発生する。

これに関連して『日本三代実録』貞観十二年（八七〇）
八月五日乙酉条には、「免^レ除隱岐国貞観七八兩年疫死百姓
三千一百八十九人」とあり、隠岐国の被害状況がうかがえ
る。この記事には脱文があるのだが、疫病で亡くなった人の
負税が免除されたものと考えられる。ここから、貞観七年と
八年の二九年で隠岐国では三千二百八十九人が死亡したこと
が判明するが、『和名類聚抄』では、隠岐国は四郡十一郷で
構成されていたので、一郷の人口をほぼ千人前後と仮定する
と、最大で二万人程度であったろう。これは負債をかかえ

たまま死亡した人の数なので、それ以外の人や乳幼児を含
めるならば、この時の疫病で死亡した人の数はこれを大幅に
上回ると思われる。天明の大飢饉では、八戸藩の人口は半
減したと推定されているが、²⁹大飢饉の被害として、あり得な
い数字ではないだろう。³⁰

飢疫に見舞われ人口が減少することで、地域社会を構成
していた人々の結合は崩壊し再編成されることとなる。人
身売買による奴婢の発生、³¹再婚による世帯の再構築もそう
した再編成の一つのあり方にほかならない。しかるに、こ
うした飢疫は全国一律に出現するわけではなかった。貞観
年間の隠岐国と同様、天平九年の天然痘被害に見舞われた
地域では人口が半減することもありえたが、³²全体として奈
良時代初頭から平安時代初頭にかけて、かなりの人口増加
が見込まれてもいる。³³当然のことながら、列島全体はモザ
イク状に構成されているのであり、地域社会を単位とした
分析が必要である。地域社会の人口動態は、列島全体のダ
イナミズムを考える鍵にもなるだろう。³⁴

三 地域史研究の新たな方法

— 空間分析 —

こうした人間と環境との関係は、思弁的に措定されるだ

けでなく、検証可能な形で把握されるべきであろう。そのためには、統計などの定量分析が必要なのだが、古代史研究では統計的な処理に適した史料が存在しないため、数値により「実証」できるものは少ない。したがって、このような手法が採用されることはほとんどなかったのだが、直接的に実験や観察を行えない学問分野では、シミュレーションの手法が一般化しており、現代科学はこうしたシミュレーションにより支えられている。

これまでに、大宝二年籍を定点として、どの程度の出生率でその人口を維持できるか、その場合の婚姻・出産といった現象がどのように推定できるか、人口変動シミュレーションを行ってきたが、史料から確実におさえられるところを定点にして、さまざまなシミュレーションを試みることは歴史学にとっても有効であろう。本来なら、以上に示した論点について、その検証結果を示すことができればよいのだが、現段階でそこまでには至っていない。これらは今後の課題とせざるをえないのだが、ここでは、その前提にあたる地域社会を理解するための空間分析の手法について述べておきたい。

まず地域社会を空間として計算機上に再現する必要があるが、これは標高データを利用して地形を復原する。もちろん大地は人間の長い間の利益により改変されており、古

代の地形を正確に復原することなど不可能なのだが、海岸線も含めておおよその復原は可能である。標高データは、メッシュ毎の標高数値であり、現在では場所によつてデータメートルオーダーのデータも存在するが、分析のレンジにあわせて選択する。古代の郡程度の規模の空間分析であれば三〇メートルメッシュの標高データでも十分可能であろう。ただし沖積地などの比較的平坦な地域の場合、沖積の度合いや旧河道の復原に困難が伴う。どの場所でも同じ条件で復原できるというわけではない。

空間の利益については、水田の復原、周辺の山野河海の復原が必要である。現在、日本では土地条件図などさまざまな有益な図が公開されているが、古代の詳細な土地条件図などは存在しない。古代・中世の荘園絵図、近世の絵図なども利用して、古代における水田空間、山野河海の空間を復原する必要がある。土地の傾斜角・傾斜方向を計算することで、ある程度、水田化の可能な土地と山地として利益される土地を区別できるが、分析対象の地域に即して丹念に追う必要がある。

近世までの村の範囲などは水系が大きな意味をもったし、古墳時代でも首長系譜が小水系によりたどられるなど、水系の復原は重要な意味をもつ。空間を構成する各メッシュに等量の降雨があったと仮定して、傾斜方向により集

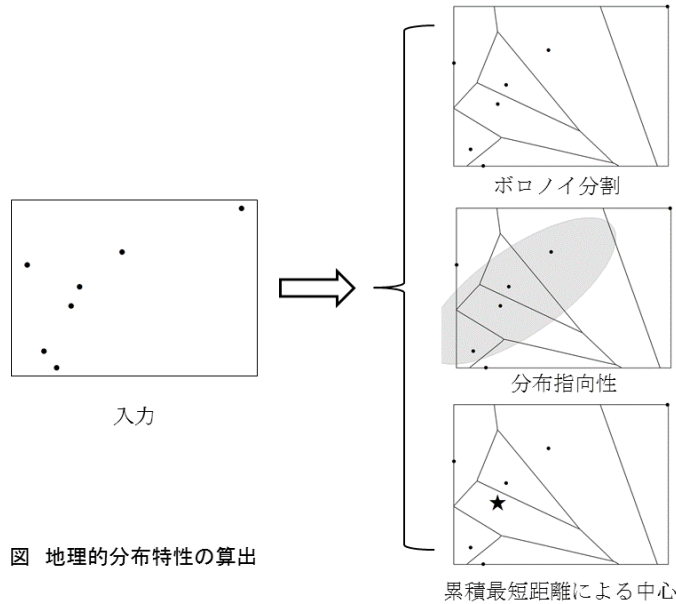


図 地理的分布特性の算出

水範囲を計算することで、水系を求めることができる。閾値を変化させることで、小さな水系から大きな水系までを示すことが可能である。水系は自然的な領域の意味をもつので、空間を構造化する際に有益である。

以上は、自然的な地理的空間を復原する際の基本的な考え方だが、そこで人々がどのように生活していたのかが問題である。人の生活の痕跡は里(郷)が手がかりになる。古代では五十戸で里(郷)が編成されるが、そこにはおおよそ二から三の村が含まれるのが通例である。里は、人為的な組織であり原理的に領域をもたないのだが、里名が地名化する場合があるように、その里に編成された人々が多く集住していた場所も存在する。里を可視化することで、ある程度の人のまとまりを示すことが可能である。その手順だが、今でも里の遺存地名から分布を推定するように、おおよその場所に代替座標を設定する。もちろん厳密な座標など求めようがないのだが、このあたりで里が編成されたとした場合、そこにふくまれる小学校や郵便局などさまざまなもので代替させる。こうして空間上に散りばめられた里の代替座標をもとにして、隣接する二点間の直線の中心に垂直二等分線を引くことで近接領域を分割するボロノイ分割を行えば、里を単位とした仮想の小領域を求めることができる。もとより仮想の空間であり、離れた空間が

人為的に編成されて里をなしている場合などには無意味だが、かなりの確度でこれが当時の人々の生活にとって、意味ある空間に相当するだろう。そこに、実際の墳墓跡や集落跡・生産遺跡などの情報を統合するならば、生活空間をより具体的に表現できるし、領域面積を計算することで、人口密度を求めることもできる。

空間の構造化については、地形上の二点間について、傾斜を考慮して最短で結ぶルートを計算することで、仮想の古道を復原することが可能である。水系とともに空間を構造化する上で重要な情報になるだろう。また、空間そのものの意味、すなわち地理的分布特性を見いだす方法もある。空間上に散りばめられた里が、郡を単位としてどのような分布の指向性をもつか、それぞれの里の代替座標間の距離と偏差を計算し、標準偏差楕円を求めることで表現することができ。さらに、郡内の里の分布から、二点間の距離の累積が最短なものを計算する、もしくは分析範囲内の平均座標を計算することで、地理的分布の中心を求めることができる。いわば仮想の郡衙である。郡衙がこのような条件で立地した保証はどこにもないので、意味がない場合の方が多いと思うが、郡衙やそれに関連する遺構の確認されていないところでは試してみる価値はあるかもしれない。いずれにせよ、これらの情報は、郡(評)がどのような

な原理にもとづいて編成されたのかを明らかにする上で有効であろう。

おわりに

以上、地域社会の生態学的アプローチの必要性と基礎的な空間分析の手法について述べた。シミュレーションである以上、限界はあるのだが、こうした手法による空間分析はそれなりに意味があるのではと考えている。これまでの歴史学における「実証」から飛躍することにもなるが、それで得るものがあるのなら躊躇う必要はないだろう。

日本の古代や中世の人々の生活条件が自然環境に密接に規定された厳しいものであったことは間違いないのだが、人間や社会を内在的に捉えるだけでなく、それを取り巻く自然との関係を考慮しようとの機運が高まってきたのは、ここ十年ほどのことではなからうか。人類が構成する社会の変化は、環境もふくめた所与の歴史的諸条件のもとでの選択の結果でもある。人類史は、ヒトの環境への適応のプロセスとして理解することも可能だが、地球上に拡散した人類の生活に即した地域生活史のレベルから組み立て直すことが肝要であろう。歴史学や考古学などの過去を扱う学問は、人類の環境への適応過程総体を考える確かな手がかりを与える

ことができるはずである。古代東アジアの辺境である日本の列島社会の地域生活史の解明が、どのように寄与しうるかが問われているのだが、地域に即して多様な適応プロセスを明らかにすることは、十分に意味のあることと考えるがいかげなものであろう。諸賢のご批判を仰ぎたい。

(しま) か(つ)り

- (1) 「二〇〇二年の歴史学界 回顧と展望 日本古代 一」(『史学雑誌』一二二五、二〇〇三年)。
- (2) 石母田正『日本の古代国家』(岩波書店、一九七一年)。
- (3) 吉田孝『律令国家と古代の社会』(岩波書店、一九八三年)。
- (4) 吉田晶『日本古代村落史序説』(塙書房、一九八〇年)。
- (5) Roy Ellen. *Environment, Subsistence and System*, Cambridge, Cambridge University Press, 1982. 大塚柳太郎ほか『人類生態学』(東京大学出版会、二〇〇二年)。
- (6) 安斎正人『人と社会の生態考古学』(柏書房、二〇〇七年)、春田直紀『文献史学からの環境史』(『新しい歴史学のために』二五九、二〇〇五年)。なお、最新の研究例に、橋本道範『日本中世の環境と村落』(思文閣出版、二〇一五)がある。
- (7) 古代史では数少ない先駆的な成果に、宮瀧交二「今なぜ環境史・災害史の視点か」(『新しい歴史学のために』二五九、二〇〇五年)がある。

- (8) 大宝二年御野国戸籍を先駆的に人口統計学的手法で分析したファリスの試算によると、半布里戸籍における出生時の平均余命は男性で三二・五歳、女性で二七・七五歳とされる(Farris W.W. *Population, Disease and Land in Early Japan*, 645-900, Cambridge, Harvard University Press, 1985)。
- (9) 今津勝紀『日本古代の税制と社会』(塙書房、二〇一二年)。
- (10) 今津勝紀『古代の家族と女性』(岩波講座 日本歴史4 古代4) (岩波書店、二〇一五年)。
- (11) 西谷地晴美『日本中世の気候変動と土地所有』(校倉書房、二〇一二年)。
- (12) 田村憲美『日本中世村落形成史の研究』(校倉書房、一九九四年)、同『自然環境と中世社会』(岩波講座 日本歴史9 中世4) (岩波書店、二〇一五年)。
- (13) 敷井真沙美「八世紀における賑給の意義と役割」(『時空間情報科学を利用した古代災害史の研究』平成一九年度〜平成二二年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書、代表者 今津勝紀、二〇一〇年)。
- (14) 『大日本古文書』二二二四七〜二五二。
- (15) 今津勝紀「古代の災害と地域社会—飢饉と疫病—」(『歴史科学』一九六、二〇〇九年)。
- (16) 新村拓『日本医療社会史の研究』(法政大学出版局、一九八五年)。
- (17) 『類聚三代格』巻十九、弘仁二〇年六月二日官符所引弘仁十年三

- 月十四日宣符。
- (18) 医疾令25典藥寮合雜藥条。
- (19) 藤田尚編『古病理学事典』(同成社、二〇一二年)。山本太郎『感染症と文明—共生への道』(岩波新書、二〇一二年)。
- (20) 今津勝紀「税の貢進—貢調脚夫の往還と古代社会—」(館野和己ほか編『日本古代の交通・交流・情報』1、吉川弘文館、近刊)
- (21) 『続日本紀』和銅五年十月乙丑条。
- (22) 『続日本紀』天平宝字三年五月甲戌条。
- (23) 『類聚国史』一七三、疾疫 以下同じ。
- (24) 米原永遠男「遣新羅使と疫瘡」(『日本古代の王権と社会』塙書房、二〇一〇年)。
- (25) なお『日本三代実録』貞観十五年十二月二日条には「大宰府廓中飢疫。賑給之」とみえる。大宰府も京と同様に考えられるだろう。
- (26) 『日本三代実録』貞観五年正月廿七日条。
- (27) 『日本三代実録』貞観六年正月廿五日条。
- (28) 『日本三代実録』貞観六年十一月十二日条
- (29) 菊池勇夫『飢饉』(集英社新書、二〇〇〇年)。
- (30) なお二カ年の死亡者数約三千二百人を二で除して、単年度の死亡者数と仮定すると、千人あたり百六十人程度の死亡率となるが、これは大宝二年戸籍での推計、千人あたり三十五人という死亡率の約四倍にのぼる。
- (31) 『書紀』天武五(六七六)年五月甲戌条には「下野国司奏、所部百姓、遇二凶年一、飢之欲レ売レ子」とあるように、下野国で凶年による飢饉に際し、子を売ることが行われていた。『書紀』持統三年(六八九)十月辛未条には「直広肆下毛野朝臣子麻呂、奏レ欲レ免二奴婢陸佰口一。奏可」とみえるが、ここで解放された奴婢六百口は天武五年の飢饉で売られたものであった可能性が考えられるだろう。
- (32) 吉川真司『聖武天皇と仏都平城京』(講談社、二〇一一年)。
- (33) 鎌田元一「日本古代の人口」(『律令公民制の研究』塙書房、二〇〇一年)。
- (34) 例えば、東国では古代を通じて列島東北部への植民がかなりの規模で行われたが、その背景の人口支持力や人口圧を考慮する必要がある。班田や出挙・賑給をはじめとする律令制による再生産システムの評価も含めた、地域社会の生態学的分析が求められている。
- (35) 今津勝紀「古代家族の復原シミュレーションに関する覚書」(『国立歴史民俗博物館研究報告』二〇〇、二〇一五年)。
- (36) この点に関連する考古学からの最新の研究成果に寺村裕史『景観考古学の方法と実践』(同成社、二〇一四年)がある。
- 本研究は、「空間解析を通じて日本古代地域社会の研究」(基盤研究(〇)研究代表者 岡山大学・社会文化科学研究科・教授・今津勝紀 課題番号 15K02833)の成果である。